

〔書評〕

## 船登芳雄著 『評伝室生犀星』

星野晃 一

船登芳雄著『室生犀星論——出生の悲劇と文学——』（三弥井書店）が上梓されたのは、犀星没後二十年にならうとする昭和五十六年九月であった。犀星文学研究の遅れという指摘はかなり長い時間繰り返されていたが、振り返ってみると、その指摘はこの著書の出現を契機に消えたように思われる。なぜなら、昭和五十六年以降、室生朝子・本多浩・星野晃一編『室生犀星文学年譜』（明治書院）、木戸逸郎著『ふるさとと遠きにありて——室生犀星伝——』（宝文館）、笠森勇著『詩の華 室生犀星と萩原朔太郎』（能登出版）、久保忠夫著『室生犀星研究』（有精堂）、星野晃一著『室生犀星——幽遠・哀惜の世界』（明治書院）等々の調査・研究成果が公刊され、さらに昭六十年には室生犀星学会が創設され、機関誌『室生犀星研究』が発行されるなど、犀星文学研究は明らかに新しい展開を示しているように思われるからである。つまり、『室生犀星論——出生の悲劇と文学——』は、犀星文学研究進展の口火を切った初めての本格的な犀星論として、記念すべき著書だったのである。

その著書の「第一章 出生の課題」には、豊富な資料、綿密な調査の上に展開された犀星出生の真実把握に関する論考が、すであつた。それは『加賀藩諸士系譜』『先祖由緒并一類附帳』などによつて実父の家系を明らかにすることから始められ、新保千代子著『室生犀星ききがき抄』（角川書店、昭37）で示された「佐部すて」、室生朝子論文「鯛の帯止——犀星生母考」（『解釈と鑑賞』昭54・2）で示された「山崎千賀（林ちか）」という二つの生母説を、「弄獅子』『作家の手記』『私の履歴書』等の記述や「戸籍謄本」「除籍謄本」等から知る事実等と対照させつつ論理的に追究したものであつた。そしてその論の主意は、その両説に残る疑問を示し、犀星生母論に対する問題を提起することであつた。

さて、このたび上梓された『評伝室生犀星』は、その生母問題と深くかかわっている。まずこの点に注目してみたい。

前著出版後十七年という調査・研究の時を経て後ということになるが、『評伝室生犀星』において船登氏は、前著で投げかけていた疑問を、完全とはいえないまでもかなりの程度に解消しえた

結果を示している。それは、宮崎夏子氏が『室生犀星研究』第14輯（平8・12）で初めて明らかにした、犀星生母を「池田初」とする新説との逢着によって得たものである。

まず船登氏は、これまでの犀星生母に関する議論が新保千代子説か室生朝子説かの二者択一に集中していたことを反省点として指摘する。その上で、長年にわたって蓄積された研究成果をもとに厳密な検証を重ね、犀星生母は「小島家またはまさの実家池田家の親族」か、あるいは「吉種夫妻が親しくしていた範囲の出身」に限定されるという推論を提示し、その線上で考究したときに認め得る存在として「池田初」説を取り上げているのである。それが詳述されているのは、第一章、特にその中の「2. 祝福されざる誕生」と「3. 消えた母」、十頁から四十五頁にわたる箇所である。

この生母、「池田初」説は宮崎夏子氏一人の調査・研究によるものなのか、あるいは新説構築に船登氏の力が添えられているのか、その点は定かではない。宮崎夏子氏は『室生犀星研究』第12輯（平7・5）に「犀星の生母をめぐって——生家小島家の立場から——」を、また第14輯（前出）に「統犀星の生母をめぐって」を発表し、第14輯において初めて「池田初」の名を示している。

その間の第13輯（平8・4）に船登氏は改めて生母問題を取り上げ、その問題についての整理と注目すべき問題提起を示した論文「犀星生母論の周辺」を載せている。それらの内容、そして発表の展開からみると、「池田初」という新説に船登氏は受動的に出

会っただけではないようにも推察される。が、それはともかく、この新説がかなりの説得力をもつのは、船登氏によってすでに提示されていた疑問の存在、および氏の長年にわたる追究と詳密な検証があるからこそだということを、ここで強調しておきたい。

犀星文学において、伝記的諸事案の中での生母問題は、作家・作品を理解する上で最も重要な鍵である。この問題をなおざりにして犀星の「評伝」は成立しない。本書において船登氏は、その生母問題の奥深くに踏み込み、確信に近いものを持ち得た。このことよって、氏は「評伝」という語を用いる意を決したのではないだろうか。第一章は、本書においてそれほど大きな意味をもっており、著者の思いがそこに熱く注がれている、ということは、その論調の迫力からも十二分にうかがえるのである。また、本書における第一章の論考は、書中においてはもちろん、犀星文学を研究する者にとっても特に注視すべきところとなっている。本書が著されたことよって、犀星生母に関しては、もはやこれまでのように新保千代子説・室生朝子説の二説並記ではすまされなくなった。さらには、本書によって提示された新説の検証が、犀星文学研究者に投げかけられたいへん重い課題となったのである。

次に、本書を構成面から見つめてみたい。「第一章 犀星文学と生い立ち」は、前記「2」「3」に加えて、「1. はじめに——復讐の文学」「4. 養母の存在と雨宝院」「5. 高等小学校中退」から成っており、第一章は文学にかかわる以前の犀星の「伝」の

部分にあたる。「1」は、さらに「故郷拒絶」「復讐の文学」という小見出しをもつ文章から成っており、前者では「小景異情 その二」の分析的な読みをおして、犀星の詩作の輝きは屈辱的な疎外感の中にこそ存在しえたのだという指摘がなされている。後者には逆境体験の中に育まれた反抗的野性こそ犀星の本領であるという指摘があり、まず導入部において犀星文学にみられる際立つた二つの特色を示すという巧みな構想をみる事ができる。

「第二章 青春放浪と詩への目覚め」は、犀星の俳句との出会いから詩作へ、そして上京、『愛の詩集』『抒情小曲集』刊行までが、「1. 裁判所給仕と俳句」「2. 詩と性への目覚め」「3. あてなき上京」「4. 詩開眼」「5. 人魚詩社の結成——萩原朔太郎、山村慕鳥との交遊」「6. 詩誌『感情』による活躍」「7. 詩集刊行と結婚」という構成で描かれている。

これを犀星の生活拠点という点から分けると、第一章に加えて第二章の「2」までが、金沢。「3」以後が、東京ということになる。また、時代で分けると、第二章の「3」までが明治時代、「4」以後が大正時代となる。つまり、本書では金沢を生活拠点とした明治時代の「伝」に、ほぼ二分の一に近い頁が当てられているのである。この事実には、「評伝」の中核部分は家系・出生・生い立ち・家庭環境等を含んだ人格形成期の実体を究明することであるという、著書の根本的な認識を見てとることができるように思われる。その究明作業によって第一章には、先の生母問題以外にも、たとえば赤井ハツに認められる母性の問題、犀星の尋常

小学校入学時期についての考察、二通の履歴書の新たな紹介など、作家論・作品論に直接かわる事柄、年譜作成において加筆・訂正の根拠となる事実が多く確認できるのである。

「第三章 小説家犀星への転身」は、「1. 初期三部作の成功とその後」「2. 関東大震災を逃れて」「3. 摸索期から第二の高場へ」「4. 戦時下の抑圧の中で」「5. 夕映えの光彩」から成っている。第二章が詩人としての犀星に重点がおかれていたのに対して、第三章は小説家としての犀星が中心にとらえられており、人間犀星の、そして犀星文学の時代とともに移りゆく姿が自然な形で享受できるように、順当に構成されている。

前と同様にこれを時代で分けると、第二章の「4」から第三章の「2」までが大正時代、第三章の「3」「4」「5」が昭和時代となっているのだが、「評」を加えた大正・昭和の両時代、特に昭和初年から没年の昭和三十七年三月までが五十頁ほどまでとめられており、饒舌を避け簡潔な表現のうちに豊富な内容を盛り込んでいるのは確かだが、歩を急いでいるようにも思われる。

周知のとおり、犀星文学は通常五期に分けられるのだが、その第一期は詩人として活躍した時代、つまりおよそ第二章の「4」から同章の終わりまでになる。第二期はまさに第三章の表題にもなっている「小説家犀星への転身」の時から始まり、第三章の「3」の中の「家を建てる」と小見出しを付したところまで。第三期は、「3」の中の小見出し「市井鬼物の爆発」の部分から終戦時までを記した「4」まで。終戦後の昭和二十年代の第四期、昭和三十

年代の第五期は、第三章の「5」にまとめられているということになる。ここに多少の問題を感じる。

本書を読むことによつて我々は、犀星作品はもちろん、従来の略伝・年譜、そして多くの資料や先行論文等を着実に読み込み、それらに根本的な吟味を加えるという重要な作業を徹しく自分に課してきた船登氏を知ることができる。そしてその結果を享受し、大いに啓発される。また、本書が、大正から昭和にかけて多量なそして多種類の作品を生み、様々な文学的営為を試み、多くの交友と交わり、個性的な家庭生活を築いた犀星の、その人と文学に関する事項をほとんど漏れなく扱っているのを知ることができる。ゆえに、犀星の変化に富む生涯を余すところなく知ることができる。

しかし、どうしても量的な不足、あるいは制約かもしれないが、それは内容に影響をおよぼしてしまふのではないだろうか。ささいな例ではあるが、たとえば昭和二十九年一月から二月にかけての約一ヶ月間の胃潰瘍による入院がある。その入院体験後、犀星は老いの中で死生観・人生観を、そして女性観、愛の意識をより深めていったように思うが、もう少し頁に余裕があれば、それにふれることもできたのではないだろうか。そうすることによつて、晩年の犀星像はより個人的に浮き彫りにされたのではないかと思う。

とはいえ、『評伝室生犀星』が犀星文学研究において卓越した著書であることは、これまでも指摘したように論を俟たない。

先に『室生犀星——出生の悲劇と文学——』が犀星文学研究進展の口火を切った本格的な犀星論であるという指摘をしたが、『評伝室生犀星』は初めての本格的な犀星評伝であり、犀星文学研究者に与える刺激はかなり強いものと思われる。

一方また、犀星が幾度も自叙伝を試みたのにも似て、「評伝」には作業の終わりが無いようにも思われる。私自身のささやかな営みを省みてそう思う。船登氏は本書の「あとがき」で、「犀星は出生のコンプレックスをバネに、反骨と放浪と貧窮の中でその文学の内実をかたちづくり、世に出た。その軌跡を私なりに跡づきたい願ひは、犀星の文学に接した当初からあった。それは、明治・大正・昭和の浮沈を生き抜いた男への文学以前の人間的関心であったかも知れない」と記している。評伝という作業には、基本的には生身の人間への格別の興味・関心が必要なのである。氏の興味・関心は、本書を上梓しおえた今、すでに新しい犀星像を生み出しつつあるかもしれない。そしてその像は、船登氏に次の表現を求めているように思われる。

(三) 弥井書店 一九九七年六月 二九五頁 二五〇〇円)

(ほしの・こういち 城西国際大学教授)